

【研究ノート】

シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅲ)

原田 覺

本稿は下記拙稿に接続するものであり、以下に現代語訳する資料などについて、特に科文の全体的構成については下記拙稿(Ⅰ)を参照頂きたい。

「シャーキャチョクデン著『了義を一つに成就すべき論書の詳細な注釈』考(Ⅰ、Ⅱ)」『国士館哲学』10、11号、国士館大学哲学会、東京、2006(平成18)、2007(平成19)年

【第31段落】他の者達の説示する[やり]方の如くであるならば| 続のこれ等の意義を否定したと成つて| [何故ならば]「個別的自己による証悟は瑜伽行派の(3/4)同意することである」と説示し了ってから清弁と月[称の]二方が否定し了り且つ| 自性[と]法身[と]生死涅槃 *hkhor hdaś*[の]一切の能生因 *skyed byed* であるのであるものはまた| 月[称]の足下が| 如何[であれ]話として| 「それ故に依他[起性]の実体は何であれ| | 事物が施設されたものとして有る(4/5)原因と成り且つ| | 有と戲論[の]全ては対境でないものであり自性は有る| | 」と[いうの]は瑜伽行派の同意することであると為し了ってから否定したが故にである|

前段落の著者の反論に続けて、敵者である「他の者達」の主張に従うならば、第24段落以下に提示した「続」即ちタントラの教/経証に矛盾するとし、その論拠として「瑜伽行派」は個別自証を承認すると認めた上で、「清弁と月[称]」が個別自証を「否定し」ているとし、更に典拠を明示しない教証を提示して「自性[と]法身[と]生死涅槃[の]」「能生因」即ち「依他[起性]」の実体は「事物が施設されたものとして有る原因」であり「有と戲論」「は対境でな」く「自性は有る」と「瑜伽行派」は承認すると認めた上で、「月[称]」がその主張を「否定し」ている「が故にである」とする。

【第 32 段落】自己の説示する[やり]方に於いてはその如くでないのであつて| 「何故ならば」続のそれは後[得]の言説と| 修習による実践の為であった(5/6)うえ| 一方のそれは等引の実体と聞[学と]思[量と]の増益を断じる為であったと説示するが故になのである| |『吉祥和合』 *dPal kha sbyor*(北京版 No. 2314、2321?)からも瑜伽行派の[考え]方のこの空性は明らかに仰せになったことなのであつて| 「何故ならば」如何[であれ]話として|(6/7)「最初に空性を詳細[に]思ったことによって| |諸有情 *lus can rnam*s の垢を清めるべし| |」と[いう]ことから| 「色が有りませんので見ることが有りませんのです| |声がありませんので聞いたことが有りませんのです| |香がありませんので嗅ぐことが有りませんのです| |味が有りませんので味わう(12a7/b1) ことが有りませんのです| |触れる[ように]為されるべきもの(所触、可触)がありませんので触れることが有りませんのです| |思う[ように]為されるべきもの(所思[惟]、可思[惟])がありませんので思うことが有りませんのです| |世尊が仰せになった *bkah stsal/bstsal ba*| 伺察すべきで無く且つ所知でない| |それ[が]そうであるその]通り[で]推論が分別し了り難いもの[で]| |二を捨離した(1/2)二として無いもの(無二)であつて| |如何[であれその]通り[に]道の真理(それそのもの)を聞きなさい| |」と仰せになり了り且つ| その後の続(北京版 No. 11~2、26-7?) *dehi rgyud phyi ma[r]*で空性の建立を『中辺[分別論]』から生起する[その]通りに説示したのである| |

著者の見解である「瑜伽行派の[考え]方の」「空性は」前段落の「清弁と月[称の]」主張とは異なるとし、その論拠として「続の」主張は「等引の実体と」聞思と「の増益を断じる為である」「が故に」「である」とし、『吉祥和合』から一(二)種類の教証を提示した上で「その後の続」の「空性の建立」の仕方は『中辺[分別論]』の主張に従っているとする。

【第 33 段落】『時の輪』 *Dus kyi hkhoro*(北京版 No. 4~6)からもこの如くに仰せになり了つて| 「密咒のこの[やり]方(2/3)に於いて世尊の夫々の続などで二種の意義を教示し了つていて| 「何故ならば」一つは世俗のであるのであるうえ| 第二は勝義によってなのである| |」と[いう]ことから| 「何であれ勝義の諦によって教示されたそれは世間から離脱したもの(出世

間)[で]| 一切の種類^のの最高と具なるもの rnam pa thams(3/4) cad kyi mchog dañ ldan pa[で]| 大手印の悉地 dños grub を成就する為に自己の心によって分別された法と離れたもの[で]| 少女達による鏡などの円光占ト[がそうであるその]通りに| 瑜伽師たちの自己の心の光明 hod gsal が(4/5)虚空に現前に顕現したもの[で]| 願望する目的の結果を給付するものであって| 結果は変化することが無い安樂の智の心なのである| |と仰せになり了り且つ| 「その様なそれは瑜伽行派の自己[の考え]方の言説に於いて勝義の諦[で]そして|(5/6) 個別的自己[による]証悟の智の経験対象として承認するけれども| 有[ると]無[いの]何として完成したかを伺察する正理[の]面で一[と]多など[の]何としても承認する様に為さなくて| [何故ならば]語[と]分別の対境から離脱したが故にである| 」とご承認になることそして| また『無垢光』*Dri med hod*(北京版 No. 2064)から|(6/7) 「ここで何の悲愍[も]所縁が無く(無所縁で)且つ詳細な分別と離れたことと| 空性[たる]一切の種類^のの最高と具なるもの[と]が三時[に]理解されることの為に三時に実行すること hjug pa[hō]なのである| |と[いう]ことは仏陀の宗の義[の]真実なのである| |」(12b7/13a1)と[いうこと]そして| 「刹那[に]一と多と離れたその智は勝者方[の]真実性なのである| |」と仰せになった| これはまた実体性は無いと述べる宗義と矛盾するものでないのであって|[何故ならば]ここで説示された全種類[の]最高[と]具[なるもの]のその空(1/2)性は戲論の辺(八[不])が何であろうと成立したものを否定する時には| 実体性が無いと述べる正理をそれ等が如何なる如くであれ[その]通り[に]承認したことによって充分であるが故にである|

前段落の著者の主張に対する教証として、更に『時の輪』から二(三)種類『無垢光』から二種類の経/教証を提示した上で、これ等の経/教証が「実体性は無いと述べる宗義と」一致するとし、その論拠として、教証にある「一切の種類^のの最高と具なるもの」即ち「空性」とは「戲論の辺」を八不によって「否定する時に」「実体性が無いと述べる正理を」「承認」する事で「充分であるが故にである」とする。

【第34段落】然らば勝義の諦と自己[による]証悟の経験されるべきもの(経験対象)[と]に矛盾[があるの]でないのであるか| と[いう]ならば[矛盾があるの]でないのであって| [何故ならば]戲論の(2/3)如何なる辺にも成立

しなかったものそれは声(語)と分別の対境として成立しなかったものである
のであるうえ| 経験されるべきものと諦[と]は経験させるもの[たる]智の
能力に於いて為された(支配下の)もの dbaṅ du byas pa[s]であるので矛盾
しないのである| |

以上の著者の議論に対して、それでは「勝義」「諦」と自証の経験対象と「に矛盾
[がある]」ことになると言う敵者の反論を想定した上で、著者は、それは「矛
盾」「でない」とし、その論拠として「戲論の」「辺」としても「成立しなかったもの
」「は」「対境として成立しなかったものであり」、更に自証の経験対象と「勝
義」「諦[と]は経験させるもの[たる]智の」支配下のものであるが故にであると
する。

【第 35 段落】第二[たる]体験の見解に対して伺察したものは| 若しも然
らば増益を断じる見解と|(3/4) 体験の見解[との]二[の各々]から| 一は
無いと否定すべき有境[であり]| 一は智の有境[である]と為されたならば
全く清浄な見解は何に対して働くのかと[いう]ならば| 波羅蜜多の乗に於
いては| その標準的見解は無いと否定すべき有境(4/5)そのものでないの
であって| [何故ならば、そう]であるならば分別することに[帰]謬すること
によってなのである| |その如くであるならばまた実体性は無い派 No bo ṅid
med pa pa の如くであるならば| この正理を伺察した先行した般若によっ
て通達されるべき何ものも生起しなかったことに於いて| 真実性は通達さ
れると名前を付けた般若それそのものを全く清浄な見解であると承(5/6)認
する者であるのであって| [何故ならば]それそのものは大乘発心の所作と
一雙に結び付いてから実行することのみによって他の見解に依らずに仏の地
に行き得るが故にである| 瑜伽行派の如くであるならば| 所取[と]能取
[の]二によって空である無い否定(6/7)或は| 無二の智に対して無変異円成
[実性] hgyur med yongs grub の識別と為すことが何の如くであろうとも|
その如くに通達される聖なる相続の個別的自己[による]証悟そのものを全く
清浄な見解であると承認する者であるのであって| [何故ならば]理由は前
と一致しているのである| |

第 1 段落の「修習によって体験する見解に対する伺察」をここでは「第二」と
して取上げる。まず「見解」を「増益を断じる見解」即ち「無いと否定すべき有

境」と「体験の見解」即ち「智の有境」とに二分した上で「波羅蜜多」「乗」即ち顕教「の標準の見解は無いと否定すべき有境」「でない」とし、その論拠として「分別することに[帰]謬する」が故にであるとする。このことを前提として、更に「実体性は無い派」は「正理を伺察した先行した般若によって通達されるべき何ものも生起しないことが即ち「真実性は通達され」たことであり、その「般若」を「全く清浄な見解であると承認する」とし、その論拠として「大乘発心の所作と一雙に結び付いて」「実行することのみ」で「仏」「地に行き得るが故にある」とする。また「瑜伽行派」は「所取[と]能取」によって空である無い否定「または「無二の智」を「無変異円成[実性]」「と為す」「如くに通達される」「個別的」自証「を全く清浄な見解であると承認する」とし、その論拠は「実体性は無い派」の場合と同一であるとする。

【第 36 段落】[密]咒(13a7/b1)の乗に於いては[性]相を取る mtshan hdzin kyi 戲論を断じるだけの能力に於いて為されたならば実体性は無いと述べる見解を正理聚から説示したそれによっても相当するけれど| 双運するお身体を成就すべきことに於いてそれのみで充分であるのではなくて[何故ならば]前[者]を真実である如くに設定したならば生起次第 skyed/bskyed(1/2) rim の能力に於いて為された天(本尊)と[密]咒は近取の因由のもの rgyu mtshan/mtshan ba[として]そして| 双運[の]受用圓滿のお身体(受用身)も勝義のお身体のみとして確定するので近取の因は世俗分によって成立し了らないが故にである| その関係はまた| 智慧の資糧を集積することを以前に発し了らず(2/3)には二次第の道の成就是生起しないうえ| それに対してそれが先行することの理解はまた| 空性の見解に対する等引から動かなかった状況そのものから二次第の瑜伽を実行する必要がある意味なのである| |

「[密]咒」「乗」即ち密教の「見解」が「[性]相を取る戲論を断じるだけ」であるとする「ならば」「正理聚から説示した」「実体性は無いと述べる見解」と同一になる「けれど」、密教では「双運するお身体を成就すべき」であるので「実体性は無いと述べる見解」「のみで」は「充分で」ないと著者は主張し、その論拠として「実体性は無いと述べる見解」「を真実である」と「設定」すると「生起次第」の本尊「と[密]咒」が「近取の因由のもの[として]」「確定」し、同じ「双運[の]」受用身「も勝義のお身体」「として確定」してしまうので「近取の因」が「世俗分

よって成立し」「ない」という過失になる「が故にである」とする。更に「世俗分」と「双運するお身体」「の関係は」順次の「関係」であって「智慧の資糧を集積」し「空性の見解に対する等引から動かない」「状況」「から」「生起次第」と円満次第の「二次第の瑜伽を実行する」ことにより、その「二次第の道の成就」が「生起」と主張する。

【第 37 段落】等(3/4)持の対境[たる]その空性に於いても二つに分かれたものであるのであって| 蘊を否認した空性と言う名前を有するもの[で]| 正理聚に説示した無い否定の分それと| 全種類[の]最高[と]具[なるもの]の空性と言う名前を有するもの[で]所取[と]能取(4/5)のあらゆる戯論を否定した代わりに残った基位 gshi dus の法界[体性]智と言うものの[の]二[の中]から| この後[者]が主要と成ったものであるのであって[何故ならば]二次第の道と結果[と]が双運するお身体一切をもこれから成就すべき必要があるが故にである|(5/6) 例えるならば| 如何[であれ]話として| 「自性 sva bhā va 等によって空性と成った| 空の状況から知った全てによって出発する必要がある[そうである]通りなのである| |その意味に於いて必要としてから| 文殊[菩薩]が| 「蘊を否認した空性は| |芭蕉[がそうである]通りに芯が無い| |全種類(6/7)の最高[と]具[なるもの]の| |空性はその如くに成る[こと]でないのだ」と仰せになったのである| |芯が無いと[いうの]はまた| [密]咒のこの乗に於いて修習によって実行すべく為されるべき空性のその見解に適さないと[いう]意味であるのだけれど| 一般[に]必要[と]出来るものは何(13b7/14a1)も無いと説示することではないのであって| [何故ならば]波羅蜜多のみによって[性]相を取る戯論を断じることに対してその最初の空性を決定する[ように]為すその正理より善妙なものを仏陀が仰せになったことは無いが故に[であり]そして| その空性に対して|(1/2) 誹謗を加えたならば| 龍樹足下の勝義を伺察する[ように]為すあらゆる正理に対して意は永遠に適さなく成ることと| 中間のご法輪[で]『解深密[経]』dGois hgral と具なるものに対して誹謗を加えた大きな過失が触れるように成るのである| |

ここでは前段落の「空性の見解」を「等持の対境[たる]」「空性」として取上げて、その「空性」を「蘊を否認した空性」即ち「正理聚に説示した無い否定」と「全種類[の]最高[と]具[なるもの]の空性」即ち「所取[と]能取の」「戯論を否定し

た代わりに残った基位の「法界体性智」とに「二」「分」した上で「後[者]が主要」とであると著者は主張し、その論拠として「二次第の道と結果[と]が双運するお身体」「を」この「空性」「から成就すべき必要があるが故にである」とする。この「道と結果[と]が双運する」という主張は、著者が本来所属していたサキャ派の道果説を基礎としているのであろう。以上の主張を更に説明する為に、典拠を明示しない経証を提示した上で「[密]咒」「乗に於いて修習」「されるべき空性の」「見解」は「必要」とす「るもの」が「何も無い」の「ではない」と主張し、その論拠として「波羅蜜多のみ」で「[性]相を取る戲論を断じる」「最初の空性を決定」させる「正理より善妙なもの」は「無い」とし、その論拠として「最初の空性」を「誹謗」した「ならば」第一に「龍樹」「の勝義を伺察」させる「正理」と「誹謗」した者の「意は永遠に適さなく成」り、第二に「龍樹」が拠り所とする「中間の」「法輪」の經典だけでなく著者が拠り所とする『解深密[経]』をも「誹謗」した「大きな過失が」我が身に「触れる」ことになるとする。従って、この「最初の空性」とは「蘊を否認した空性」を指すことになる。

【第 38 段落】 この意義に付いて或る者は云(2/3) う | 「法の界を浄治すべき基礎(所浄基) sbyaṅs/sbyaṅ gshi に設定するのは | 時の輪師 dus kyi hkhor lo pa だけの[考え]方の法語 chos skad なのである | 」 | と言うけれど | その意義そのものは『空行母金剛帳』 *mKhaḥ hgro ma rdo rje gur* (北京版 No. 11) から明らかに仰せになったことなのであるであって | [何故ならば] 如何[であれ]話として | 「心の金剛から生起した | 」 | 様々な有情(3/4) は自性を有った者[で] | 「心は自己(我)の全くの分別によって | 」 | 衆生は汚垢によって黒く為された | 」 | そのことによって総てに全く努力することによって | 「心の金剛に於いて全く浄治すべきであり | 」 | 清浄な心は安樂であるのだ | 「煩惱[たる]毒は一切を害する | 」 | と[いつて]心の(4/5)金剛は浄治すべき基礎[であり]そして | 「勝れた安樂は浄治した結果[であり]そして | 」 | 煩惱は浄治すべく為されるべき[対象である]と仰せになったのである | 」 |

第 35 段落以下に著者が主張した「意義に」対立する、敵者である「或る者」が説示する「法」「界を」所浄基「に設定するのは」「時」「輪師だけの」特徴的な「[考え]方」とであるとする主張に対して、著者が主張した「意義」は『喜金剛統』の儀軌である「『空行母金剛帳』からも」説示しているとして、同儀軌から一種類の経証を提示して「心の金剛は」所浄基であり「勝れた安樂は浄治した結

果[であり]」「煩惱は淨治す」「べき[対象である]」と主張する。

【第 39 段落】それから淨治すべく為す対治を識別することは| 「若しも空が方便であるのであるならば| |その時[には]仏性/仏そのもの saṅs rgyas ṅid は変化しない| |結果は原因いがいでないが故にである| |方便(5/6)は空性でないのだ| |」と[いう]ことであって| 意義は説示されたままのことがそれそのものである| |

著者は主張を続け「淨治」させる「対治を識別する」ならばとして『空行母金剛帳』(?)から一種類の経証を提示して「対治」としては「空が方便であ」り「方便は空性でない」とする。

【第 40 段落】然らばその最初の空性を教示した必要は何かを考えることに於いて| 「諸見解から顛倒した者達と| |我であると[の]見解を追求する tshol/hṭshol 者達が| |我が愛着される意樂を回避する為に| |空(6/7)を勝者方が仰せになった| |」と[いう]等[の]ここに於いて汚垢を淨治すべく為す対治[たる]智は何かと言うならば| 安樂[と]空が無差別である智なのである| |と説示するのは| 「その故[に]曼荼羅[の]輪と[いう]| |方便は安樂の律儀であって| |仏[の](14a7/b1)我慢[の]瑜伽により| |仏性/仏そのものに迅速に成る| |祖師[の]三十二[の]相は| |主尊[の]八十随好に伴う| |」と[いう]のである| |要略[する]ならば双運[の]受用圓滿のそのお身体は方便[たる]安樂[と]空が無差別であるその智[の]成就すべく(1/2)為すべき[対象であり]そして| 成立した結果が双運するそのお身体はまた原因[たる]曼荼羅[の]輪 dkyil [hḱhor] hḱhor lo の行相を有つものなのである| |と説示するのは| 「それ故[に]方便の成就すべく為すべき[対象であり]そして| |それは方便の行相を有つものなのである| |」と仰せになった| 意義をその如く[に]お心に設定し了ってから| 昔の教授者達は| (2/3) 聞[学と]思[量]の増益を断じる見解に対して毒を有つものそして| 修習 sgoms/sgom pa[s]によって実行された見解に対して毒は無いと説示するのである| |

第 37 段落で議論になった「最初の空性を教示」する「必要」性について、著者は『空行母金剛帳』(?)から一種類の経証を提示して「我」「を回避する為に」「勝

者方が仰せになった」とする。それを前提として「汚垢を浄治」させる「対治」である「智は」「安楽[と]空が無差別である智」「である」とし、同じ典拠から一種類の経証を提示する。以上を「要略」して「双運[の]受用」「身」「は方便[たる]安楽[と]空が無差別である」「智[の]成就す」「べき[対象であり]」「結果が双運する」「身」は「原因[たる]曼荼羅[の]輪の行相を有つもの」「である」として、同じ典拠から更に一種類の経証を提示した上で「昔の教授者達は」聞思[の]増益を断じる見解」は「毒を有つもの」であり「修習」「によって実行された見解」は「毒」が「無いと説示する」と著者は主張する。

【第41段落】その如く[に]説示する[と]知る時に| 最期のご法輪の経は中間のご教誨に依存してからまた了の義を有つものそのものとして成立し了(3/4)つて| [何故ならば]中間のご教誨が増[益と]損[減]のあらゆる分別を排除し終えたことを基礎と為した上で修習によって実行された究竟の了義それそのものはこれであるのであるのだと明らかに確定したことであるが故[に]である| 何の経にと[いう]ならば| 経部[たる]『解深密[経]』dGoris pa(4/5) nes hgre[の]様な波羅蜜乗の能力に於いて為された最後の諸ご教誨に於いて| 個別的自己による証悟の智の経験する[ように]為されるべき[対象]として自性[たる]法[の]お身体と| 善逝の蔵の名前を有つそれそのもの[と]は明らかであるが故[に]であり[そして]| 最後のご教誨そのものの(5/6)能力に於いて為された密咒の乗でも| 究竟の了義は否定すべく為すべき[対象たる]所取[と]能取のあらゆる戲論を否定した法界[体性]智を明らかに教示したのであるのであるうえ| それは中間のご教誨に語が如何ようであれ[そうである]通りそのものによって教示されておらず且つ|(6/7) 如何程であれ法のこの界は最低でも信解[と]作意によって通達されないもの[であり]その限りで二次第の道の実行するよう為すものを知ることは生起しないが故[に]である|

前段落の主張を前提として著者は議論を進めて「最期の」「法輪の経は中間の」「教誨に依存してから」「了」「義を有つもの」「として成立」とし、その論拠として「中間の」「教誨が増[益と]損[減]の」「分別を排除し」た「ことを基礎と」「した上で修習によって実行された」「了義」「そのものは」「最期の」「法輪の経」「であるが故[に]である」とする。更に以上の主張には経証があることを示して『解深密[経]』等の「波羅蜜乗の」「最後の」「教誨に於いて」「個別的」自証

「の智の経験」「されるべき[対象]として」「自性[たる]」「法身と「善逝の蔵」とが「あるが故[に]であり」また「最後の」「教誨の」「密咒の乗でも」「了義は否定」「すべき[対象たる]所取[と]能取の」「戲論を否定した」「法界体性智を「教示した」けれども、その法界体性智は「中間の」「教誨に」は言葉「通り」には「教示されて」いないし、また「法」「界は」「信解[と]作意によって」は「通達されないもの[であ]る」「限り」「二次第の道の実行」させる「ものを知ることは」出来「ないが故[に]である」とする。

【第 42 段落】ここで或る者達は云う| 「天と[密]咒は法の界のみに於いて成就されるべきであると説示することそれは『時(fol. 14b7/15a1)の輪』の法語と混合したものであるのだけれど| 聖者ご父子などの[考え]方に無いのである」と言う| それは熟知[すること]無しに慌てたことなのである| 【何故ならば】『集[修]行灯』から|

「全く離脱した身体(寂身)に於いてまた(1/2)天の色は無く| 【何故ならば】身体は極微塵を集積したもののみなのである| 【何故ならば】身体は極微塵を集積したもののみなのである| 全く離脱した語(語寂)に於いてまた天の行相は無く| 【何故ならば】諸々の声は木霊の様なものである| 【何故ならば】諸々の声は木霊の様なものであるが故[に]なのである| |その究竟の全く離脱した心(心寂)は一切の行相(2/3)の最高と具なる天のお身体の実体として獲得される様に成らなくて| 【何故ならば】心は感覚のみなのであるが故[に]なのである| |この正理によるならば世俗分 kun rdzob ba/pa に依存し了ってから住処(生住滅の住)は獲得される様に成らないのである| |そのことによるならば智のみによって天の実体性として生じられたものが阿闍梨の御前から shal sñā nas [las] 通達される様に致しますべき様をお願いするのです| |と[いう]ことから|

自己の心は真実が如何様なもの[であれそうである]通りに完全に知られるものと謂われる[五]蘊と[十八]界と[十二]処などに於いてまた無いもの[で]| 知のみとして完全に顕現するもののみが(4/5)一切と具なる天のお身体として把握されたものそれはまた| 幻と夢などの十二の比喻が近く例えるこれは諸仏の意の自性のお身体なのであるのだ| |

金剛弟子が申上げたことは| 依存すべき身体無しに心の(5/6)自性はまた無い| 心無しにまた身体は所縁として無い| と経教の言葉から仰せになったならば| 如何なる如くであるならばただ心のみによってお手とお足などのもの[たる]一切の相と具なる天のお身体は円満する様に成るのか

| (6/7) 所縁の見解を有つ者達は経教と通達[と]無しに勝解する様に成らないのである| |それによるならばその者達の所縁として無い天の真実性を容易に現前に為すべき方便を金剛阿闍梨[たる]祖師が説示しする様に申上げる|

金剛阿(fol. 15a7/b1)阿闍梨が述べたことは| 摩訶薩よ善哉善哉| |誰[であれ]経部などの[やり]方におわす方と| 生起の次第に住する修習者方はまた幻の様な[もの]そして夢の様な[もの]そして| 影像の様な[もの]と喩えに(1/2)設定し且つ特別に信受するけれども| その方々ではその喩えによって意の自性の天のお身体が円満する様に成ったことを知る様に成らないのである| |そのことによるならば私が瑜伽[の]続(部)の後に追隨し了ってから金剛薩埵が円満する様に成る因と縁があなた(2/3)に理解されるように為されるべきなのである| |真実にであるならば心は形色と顯色と離れたもの[であり]| 顯現のみ[たる]虚空と等しい実体性[たる]勝義の諦と同様のもの[である]と理解されるに困難なのである| |と[いう]ことから般若と方便[と]の二顯現は(3/4)五光明と共であり且つ各種のものは一切の功德と具のもの[であり]幻の様な天のお身体に成るのである| |これの乗物は何かと云うならば| 風であると謂われて| 心の金剛で何[であれ]あるものは馬の如きに乗ってから何処で[も]望むところそこに遷移する様に成るのである| | (4/5)

と[いう]仏の色のお身体は自己の近取[たる]心の金剛から生起するものであると説示されたのである| |その金剛はまた| 心[たる]自性による光明[であり]そして| 勝義の諦であると説示され了り且つ| 死は光明であると[いう]ことはまたそれそのもの(『集[修]行灯』)の内部(5/6)細目に説示されたものであるのであり且つ| それはまた上人[たる]継承者の教授によって摂受されないならば輪廻の原因[であり]そして| それによって摂受されるならば双運[の]受用円満[の]お身体の近取の原因そのものであると説示されたものであるのであって| [何故ならば]それそのもの(『集[修]行灯』)から| 如何[であれ]話として|

「水の中に生起した丈(6/7)夫の影像は安樂の言葉と苦痛の言葉を詮説しようとして出来ないのである| |それ[が]そうである]通りにこの識はまた始めに死ぬ身体の自性を完全に捨離し了ってから| 凡夫[たる]異生の中間の有と謂われる輪(15b7/16a1)廻の原因と成るのである| | [亡くなった]方[たる]上人[たる]継承者の次第 rims/rim によって一切の如来の教授を獲得した

方々は| 自己に対する加持と謂われるこれの如く[に]壁の布絵が鏡[の]中の色として顕現するそれが(1/2)[そうである]通りに| 金剛のお身体[たる]実体性の自己そのものを化作して| 一切の行相の最上と具なるもの[たる]お身体を見るべきことによって満足することが分らない(飽くこと無き)chog mi ses pa大丈夫の三十二相などによって身体に莊嚴された者であって| 要略としてならば一切の仏の功德(2/3)によって莊嚴された者であると謂われる間に於いてなのである| |と仰せになったのである| |

第 38 段落の敵者と同様の「或る者達」の反論として「天と[密]咒は」法界「に於いて成就される」「と説示する」のは『時輪』の特徴的な考え方「と混合したものであ」って、龍樹と聖提婆などの[考え]方に無い」とした上で、著者はその反論を「熟知」していない浅慮であると否定して、その論拠として『集[修]行灯』から一種類の教証を提示してから「仏の」色身「は自己の近取[たる]心の金剛から生起」し「金剛は」「心[たる]自性による光明[であり]」「勝義の諦であると」し、更に「死は光明である」として「死は」「上人」「の教授によって摂受されないならば輪廻の原因[であり]」「教授」「によって摂受されるならば双運[の]」受用身「の近取の原因」「であると」し「死」に関する主張の論拠として、再び同じ典拠から一種類の経証を提示する。

【第 43 段落】この品に対して他の者達は云う| 「[密]咒のこの乗に於いて智慧の資糧を集積しそして空性を修習する時に| 波羅蜜多の乗から説示された見解が頂点を決定し終わった空性(3/4)それを修習することであるのであるけれど| そこに説示されなかった空性を修習すべく為されるべきことと通達されるべく為されるべきこと[と]は何も有るのでないのであり且つ| 特に[密]咒の意義のみを思惟し了ってから蘊などは無所縁であると意に作することは断空 chad ston を修習することであるので何にも適することではないのであるのだ」(4/5)と云う| それは合理でないことに於いて二であって| そこに説示されなかった空性は修習すべく為されるべき[対象]でないのことは合理でない| そこに説示されなかった空性が通達される様を為す方便は無いことは合理でないのである| |

前段落の著者の主張に対して「[密]咒」「乗に於いて智慧」「資糧を集積し」「空性を修習する時」は「波羅蜜多」「乗から説示された」究極的な「空性」「を修

習する」「のであるけれど」「波羅蜜多」「乗」「に説示されなかった空性を修習す」「べきことと通達される」「べきこと[と]は何も」無く「特に[密]咒の意義」「を思惟し」て「蘊などは無所縁であると」作意する「ことは断空」「を修習することであるので」如何なる点でも不適切であると批判する敵者たる「他の者達」の反論を想定し、著者はそれに対して「合理でない」として、第一に「波羅蜜多」「乗」「に説示されなかった空性は修習す」「べき[対象]でないの」「は合理でな」く、第二に同じく「説示されなかった空性が通達される様に」させる「方便」が「無い」のも「合理でない」とする。

【第44段落】最初は| あなたの意図は中観[の]正理聚から説示されなかった空性(5/6)の名前を有つ或る有効なものは[密]咒の[考え]方から説示されなかったのである[と]想う[よう]に思惟したことであるのであるけれど| それは本当に正理でないのであって| [何故ならば]全ての行相[の]最高[と]具なる空性と謂われるものと| 空[と]色[の]大ご手印と謂われるものと| 光明の次第と[謂われるもの]と|(6/7) 自性[たる]俱生の智と謂われるもの[と]等は[密]咒に於いては空性[であり]そして| 勝義の有効な諦であると仰せになったうえ| 正理の聚に於いて説示された空性は無いと否定すべきだけの部分から説示されたので全ての行相[の]最高[と]具なる等[の](16a7/b1)それとそれ等の性相[の]基礎として適さず且つ正理聚に於いては異相のものでないのである勝義の或る諦を識別し了る[の]に無いと説示されたが故[に]であり]そして| 『二諦[論]』 *bDen gr̥is* (デルゲ版 No. 3881~3)に於いて| 「文殊[菩薩]がマア真実を問うた| |勝者のお弟子は仰せになろうとせず[に](1/2)おわした| |」と[いうこと]と| 『明句[論]』 *Tshig gsal* (北京版 No. 5260)に| 「聖者方の勝義は何も仰せになろうとしないことであるのであるのだ| |」と[いう]こと[と]からその意義は明らかであるが故[に]なのである| |

前段落の「合理でない」第一を「最初」に採り上げて、先ず敵者の主張は「中観[の]正理聚から説示されなかった空性」は「[密]咒の[考え]方からも」「説示されなかった」と「意図」したものであるとした上で、著者はその主張は「正理でない」とし、その論拠として「全ての行相[の]最高[と]具なる空性」と「空[と]色[の]大ご手印」と「光明の次第」と「自性[たる]俱生の智」と「は[密]咒に於いては空性」と同義で「勝義の有効な諦である」とし、更に「正理」「聚に」「説示さ

れた空性は無いと否定すべき」「部分から説示されたので全ての行相[の]最高[と]具なる」ものと、以上の同義語の事相「として適さ」ないし、また「正理聚に於いては異門」「でない」「勝義の」「諦を識別」する為に「無いと説示」した「が故[に]である」とし、加えて『二諦[論]』と『明句[論]』から各一種類の教証を提示して「真実」や「勝義」即ち「空性」が言語表現を超越したものである「が故[に]なのである」とする。

【第 45 段落】これと[密]咒[の考え]方[と]に於いて空性を詮説した[と]離脱したと説示された二は意義が同一でないのであって――|――[何故ならば]ここで(2/3)は空性と謂われる法を分別することは何ぞ況や無分別の対境からも脱したものであると説示されたうえ――|――[密]咒に於いては――|――聖者方の個別的自己[による]証悟の智の或る経験する[ように]為されるべき[対象]に対してそこで識別し了ってから――|――その様[に]それを語が詮説するべきで[無く](詮説できず)そして分別が(3/4)把握し了るので無し(把握し了れず)にマア――|――少女の安楽と円光占卜などの比喻と結び付け了ってから説示されたが故[に]である――|――例えるならば――|――「詮説するべき[で]無い[こと]が勝義であるのである[が]故になのである――|――」と[説示され]そして――|――「聖者によってご了解される[が]故[に]思うので無いことそのものである――|――」と『宝性[論頌]』に説示されたことと(4/5)同様なのである――|――

著者は前段落の「正理聚」「と[密]咒」「に於いて空性を詮説した[と]」「説示」したり「空性を」「離脱したと説示」したりした「二は意義が同一でない」とし、その論拠として「空性」である「法を分別することは」「無分別の対境からも脱したもの」であり、更に「[密]咒に於いては」「聖者方の個別的・自証「の智の」「経験」対象を「識別し了ってから」「語が詮説」できず「分別が把握し了れず」「に」「少女の安楽と円光占卜などの比喻」「から説示されたが故[に]である」とした上で「例え」として『宝性[論頌]』から二種類の教証を提示する。

【第 46 段落】蘊など[の]無所縁が断空に趣くならば諦[として]無[いこと]もそこに趣き了って――|――[何故ならば]諦の諦[として]成立[したこと]と蘊など[と]は言説として有ることと相応するが故[に]である――|――断空のその過失は貴方自身に入って――|――[何故ならば]蘊など[の]世俗の諸法(5/6)は正量によって成立したものそのものであると承認し了ってから――|――正理によって伺察

すべき時[に]何も獲得しないことそのものとしてマア貴方が承認する上その意義に於いては月[称]の足下が「空性が事物の破壊原因に[帰]謬するものである」と謂う大非正理をそこで承認することによって(6/7)なのである | |

著者は「蘊など[の]無所縁が断空に趣くならば」「諦」「無」「も」「断空に」「趣く」とし、その論拠として「諦の諦」「成立」「と蘊など」「は言説として有る」に過ぎない「が故[に]」である」とする。また「断空の」「過失は」著者ではなく、敵者である「貴方」にあるとし、その論拠として「貴方」は「蘊など[の]」世俗の諸法は正量によって成立した「と承認し」た上で「正理によって伺察」するならば「何も獲得しない」と「承認する」けれども、「その意義」は「月[称]の」「謂う」「大非正理を」「承認すること」であるが故にであるとする。

【第 47 段落】それによるならば智[慧]資糧が集積されるべき sog/sogs 時[に]見解によって究明された無い[と]否定[すべきこと]そのものを修習すべく為されるべき[対象]であると同意することと | 空性の智の金剛は私であるのだ | | と修習する様に説示することをまた承認し「ること[と]」は矛盾であるのであって | 「何故ならば」貴方によっては空性は(16b7/17a1)智の実体であると同意されないが故[に]である | それに付いてこれ[たる]話であると[して] | 「対境[たる]空性と有境[たる]智が無差別に趣いたことそこに我慢を設定することは法[の]お身体を道[と]為す意義であるのだ | | 」と云う | 然らばそ[の]時の我慢を把握する(1/2)[考え]方それは世俗の諦に於いて等引したことそのものに帰謬する様に成って | 「何故ならば」対境[たる]空性と無差別に趣いた智それを貴方方が世俗諦であると承認するが故[に]である |

著者は、従って「智[慧]資糧が集積される」「時[に]見解によって究明された無い」「否定」「を修習す」べき[対象]であると「すること」「空性の智の金剛は私であるのだ」と修習する「ことを」「承認」す「ること[と]」は矛盾である」とし、その論拠として、敵者である「貴方」は「空性は智の実体である」ことに「同意」し「ないが故[に]」である」とした上で、典拠を明示しない教/経証を提示する。そして、その教/経証で言う「我慢」について「我慢を把握する[考え]方」は世俗の諦に於いて等引したこと「に帰謬する」とし、その論拠として、敵者である「貴方」は「対境[たる]空性と無差別」である「智」「を」「世俗諦であると承

認するが故[に]である」とする。

【第 48 段落】また讃頌聚と| 波羅蜜多乗の(2/3)最期のご教誨から説示しなかった空性[で密]咒から説示したものは無いのであると[いうの]も適切でなくて| [何故ならば]波羅蜜多乗の最期のご教誨に於いて所取[と]能取が二として無い智だけのみが詳細に説示されたけれど| 煙と陽炎の様な空性など(3/4)と| 明[相と]増[相と]得[相の]三[相]snañ mched thob gsum と名前の異門として説示された甚空 śin tu stoñ pa と| 大空と一切空と謂われるそれ等も説示されなかったことによってなのである| |

第 44 段落の敵者の主張を再び取上げて「讃頌聚と」「波羅蜜多乗の最期の」「教誨」に「説示しなかった空性[で密]咒」に「説示したものは無い」とし、著者はその主張は「適切でな」いと否定し、その論拠として「波羅蜜多乗の最期の」「教誨に於いて所取[と]能取が」無二である「智」「のみ」を「説示」した一方で「煙と陽炎の様な空性」「と」「明[相と]増[相と]得相[の]三[相]と」「甚空と」「大空と一切空」を「も説示」しなかったが故になるのであるとする。

【第 49 段落】要略としてであるならば[密]咒の乗に於ける空性を修習する意義は双運を修習する(4/5)ことであるのであるうえ| 双運の意義はまた二と為されるべく無い(為され無い)ことであるのであるうえ| その様に修習することは性相乗(顕教乘)として有るのでないのであって| [何故ならば]そこに於いては二資糧が集積されるべき時[に]世俗と勝義[の]個別のものそのものを修習すべく為されるべき[対象]であると説示したが| 二[として]無[いもの]として修習する(5/6)様に説示されなかったが故[に]であり[そして]| 『秘密集[会]』gSañ ba hdus pa[r] (北京版 No. 81)に| 「事物が無いことを修習することは無い| |」と[いう]等の意義は| 聖者ご父子が二諦を個別のものとして修習することを否定し了ってから| 双運を修習することを究竟の意義であると説示する[必要があり]そして| 『[吉祥]和合』Kha(6/7) sbyorに| 「空を修習する様に為されるべきでなくて| |」と[いう]等の意義はまた空と非空 stoñ min を個別的に修習することが明らかになってから双運を修習することに付いて説示する必要があるが故[に]であり[そして]| 中間のご教誨の直接[的]教示の空性を修習するや[り]方は| 『入行[論]』sPyod hjug(北京版 No. 5272~82)に| (17a7/b1) 「空性[の]習気が習熟

されることによって| |事物の習気を捨離する[ように]成り且つ| |何も無いと習熟されること gams/goms pa から| |それも後から捨離するように成る| |」と[いうこと]と| |「如何なる時[であれ]事物と無事物などが| |知覚の前に住さない[時]| | (1/2) 所[の]時[に]他の行相は無いので| |所縁は無く最高に静寂である| |」と[いう]ことより以外のことは説示されなかったうえ| [密]咒に於いては双運と光明の次第の様なものに於いて我慢を設定すると説示されたけれど| 所縁[として]無[いもの]として設定すると説示しなかったが(2/3)故[に]である| 『喜金剛』 *Kyāhi rdo rje* (北京版 No. 10) から| |「事物は無いことが完全[に]理解されることによって| |事物を修習する[ように]成る般若を有つものである| |」とも説示されたのである| |

第 44 段落から前段落までの「要略として」著者は「[密]咒の乗」で「空性を修習する意義は双運を修習することである」とし、更に「双運の意義は」「二と為されるべ」きで「無いことである」とし、更に「その様に修習することは」顕教乗には無いとし、その論拠として、第一に顕教乗「に於いては二資糧」を「集積」す「べき時[に]世俗と勝義」を「個別のもの」として「修習す」「べき[対象]であると説示し」て「無」「二」「として修習する」べきであるとは「説示」し「なかったが故[に]であ」るとし、第二に『秘密集[会]』から一種類の経証を提示し、その経証の「意義は」龍樹と聖提婆「が二諦を個別のものとして修習することを否定し」た上で「双運を修習すること」が「究竟の意義である」と「説示する」「必要があるが故[に]であ」るとし、また『[吉祥]和合』から一種類の経証を提示し、その経証の「意義は」「非空を個別的に修習することが明らかになってから双運を修習すること」を「説示する必要があるが故[に]であ」るとし、第三に「中間の」「教誨の直接[的]教示の空性を修習するや[り]方」として『入行[論]』から二種類の教証を提示し、一方で「[密]咒に於いては双運と光明の次第」「に於いて我慢を設定すると説示し」たけれども「無」「所縁」「として設定すると」は「説示しなかったが故[に]である」として『喜金剛』から一種類の経証を提示する。

【第 50 段落】第二は| 「空性が通達される方便[で]波羅蜜多の乗で或る説示されなかったもの[である密]咒の乗で説示された(3/4)ものは無いのである| |」と云うことそれは最大[に]本当に正理でないのであって| [何故

ならば]聖提婆 Arya De ba[s]が| 「数千万劫に於いてまた| | [見]聞の彼岸[に]到達する[ように]成った[として]も| | 自己(我)を加持すべきことから背いたもの| | 彼によって彼自身は理解される[ように]成らない| |」と[説示したこと]そして| 「全ての法(4/5)は夢[と]幻の様であると| | 全ての仏教徒は述べるけれども| | 自己を加持すべきことから背いたものによって[は]| | 夢[と]幻の様である[と]通達されることは無い| |」と[説示したこと]そして| 『喜金剛』からも| 「他者が詮説すべき[こと]でない俱生のものは| | 何としてもマア獲得されなくて| | 上(5/6)人の時[と]方便[と]に]依存したこと| | 自己の福德から理解される[ように]為されるべきである| |」と[説示したこと]そして| 「これは加持すべき次第であるが故[に]| | 遍智[の]智がそれである様[に]| |」と[説示したこと]そして| 『五次第』と『集[修]行[灯]』 sPyod bsdus に於いても「光明の次第が通達されるのは上人の加持(6/7)と第三灌頂に依存する」と説示したことそして| 教授の諸典籍に於いて「四灌頂[の]個々に依存する見解の各々の同様でない次第は通達[される]原因が有る」と説示したことそして| 個々の円満次第の前に各々の加持を説示したことそれはまた| 加(17b7/18a1)持の力量によってかくかくなどの見解が通達されることと| その相続が習熟されること[と]に付いてお考えになってからその様に説示したが故[に]なのである| |

第 43 段落の敵者の主張が「合理でない」第二の点の敵者の主張を、ここでは「空性が通達される方便[で]波羅蜜多」「乗で」「説示され」ず「[密]咒」「乗で説示されたものは無い」とし、この主張を著者は「正理でない」とし、その論拠として、典拠が不明である「聖提婆」の二種類の教証と『喜金剛』からの二種類の経証と『五次第』と『集[修]行[灯]』からの一種類の教証と「教授の諸典籍」からの一種類の教証を提示し、それ等の教/経証と共に「個々の円満次第の前に各々の加持を説示したこと」「は」「加持の力量によって」「見解が通達されることと」「その相続が習熟されること[と]」を「お考えになって」「その様に説示したが故[に]なのである」とする。

【第 51 段落】また或る者達はいふ| 「「[密]咒の方便善巧に依存せずに波羅蜜多乗単独の道によって空(1/2)性が通達されることは無いのである| |」と説示するのは主尊[たる]サキャパ Sa skya pa[hi]の[考え]方なのである| |」と云うそれ等は| 他の方のチベット[人]達が| 「中観帰謬派がいいに一

切智は況や| [解]脱の道はまた無いのである| |」と述べることに相応する(2/3)ので| 大乘の法を捨離した過失と成り且つ| それ等の主導方は| 波羅蜜多乗単独の道によって十地が完全に円満するとお考えになるので合理的ではないのである| |

前段落の著者の主張に対する批判を想定して「[密]咒の方便善巧に依存せずに波羅蜜多乗単独の道によって空性が通達されることは無い」と説示するのは「サキャパの[考え]方」「である」とする。これに対して著者は「合理的でない」とし、その論拠として、この批判は「中観帰謬派いがいに一切智」と「[解]脱の道は」「無い」とする考え方と同一な「ので」「大乘の法を捨離した過失と成り」またその一方で「サキャパ」と「他の」「[人]達が」「波羅蜜多乗単独の道によって十地が完全に円満すると」「考え」ているが故にであるとする。

【第52段落】また或る者達という| 「中間のご教誨の(3/4)直接[的]教示に無い空性を[密]咒の乗で修習すると有ると説示するならば| 如何[であれ]話として| 「波羅蜜多の離戲[論]から| |残余の見解が有るならばマア| |その見解は戲論を有つものと成る| |」と[いう]ことと矛盾するのである」と云うけれど| それ[たる]話として(4/5)云う汝はまた| 有境が最高に成らない大安楽によって| 対境[たる]離戲[論]が通達されるその見解その様なそれは波羅蜜多者達に有るのか無いのかと分別したならば如何[であれ]話として述べる| 「我々は| 離戲[論]sbros/spros bralを聞[学と]思[量]によって決(5/6)定する[ように]為す正理[で]波羅蜜多乗で説示されたことから[他に]一つの残余が(も)そこに有るものでないのだ| |」と[いうこと]そして| 「等引に於いて体験する ñam/ñams su myoñ bahi 双運の見解が[密]咒[の考え]方の不共のものそれに於ける後に獲得したものとして戲論したものを否定する[やり]方(6/7)は波羅蜜多の[考え]方の様に承認する必要がある| |何故ならば]有る[と]無い等の一切の戲論を否定する必要があるのである| |」と[いう]意義なのである| |

第50段落の著者の主張に対する敵者である「或る者達」の批判を想定して、著者が「中間の」「教誨の」「直接[的]教示に無い空性を[密]咒の乗で修習する」「と説示するならば」敵者の提示する、典拠が不明の教/経証「と矛盾する」とし、その批判に対して著者は、その様に批判する「汝」こそ「有境が最高に成らない

大安楽によって「対境[たる]離戲[論]が通達される」「見解」「は波羅蜜多者」「に有るのか無いのか」を「分別したならば」「汝」は第一に「我々は」「離戲[論]」を「聞思」によって「決定」させる「正理[で]」「波羅蜜多乗で説示されたこと」以外の「残余」が「有る」とはしないと言う「意義」を言わねばならないし、第二に「等引」で「体験する」「双運の見解が[密]咒[の考え]方の不共のもの」「に於ける」后得「として戲論したものを否定する[やり]方は波羅蜜多の[考え]方の様に承認する必要がある」り、その論拠として「有る[と]無い等の一切の戲論を否定する必要がある」が故にであると言う「意義」を言わねばなくなるとする。

<131>【第1段落】最初に於いて| 空性の有名なものは二であって| 語と分別が施設した空性[で]宗義に於いて共許であるものと| 住する[考え]方(本性)に於いて成立した自性[たる]空性[で]瑜伽師が体験するもの[と]なのである| |最初は| 無いと否定すべきものと知覚[たる]法(1/2)と性質[たる]他を排除するものと共相として設定し了る必要があるものそのものであるが故[に]であり| 勝義の諦として不適切であって| [何故ならば]瑜伽[の]現前[識]の経験するように為されるべき[対象]として合理でないが故にでもなのである| |

著者は「空性の有名なもの」として、第一に「語と分別が施設した空性[で]宗義に於いて共許である」「空性」「と」第二に本性として「成立した自性[たる]空性[で]瑜伽師が体験する」「空性」があるとし、第一の「空性」「は」「無いと否定すべきものと知覚[たる]法と性質[たる]他を排除するものと共相として設定し了る必要があるもの」「であるが故[に]」「勝義の諦」ではないとし、更に論拠を重ねて提示して「瑜伽[の]現前[識]の経験」「されるべき[対象]」「でないが故にでも」「ある」とする。

【第2段落】その第二は勝義の諦として設定する必要があるが| [何故ならば]仏の智が(2/3)また対象 don そのものをご覧になるので対象を法と分別[と]が破壊すべく出来ないので金剛[であり]そして勝義として事を為す能力 don byed nus pa[s]であるので自相と騙さないこと[と]によって諦そのものであるが故[に]である| その住する[やり]方が通達される方便は二であって| 波羅蜜多による聞[学と]思[量]の門からと|(3/4) 密咒者による

自己を加持したこと byin rlabs/briabs と身体的作用を束縛したものと灌頂の次第[と]などから[と]なのである | |

前段落の第二の「空性」について「勝義の諦として設定する必要がある」とし、その論拠として「仏」「智が」「対象」「をご覧になるので対象を法と分別[と]が破壊」「出来ないので金剛[であり]」「勝義として事を為す能力であるので自相と騙さないこと[と]」によって諦「であるが故[に]である」とした上で「その」状況に「通達」す「る方便は二であり」、第一は「波羅蜜多による」「聞」「思」「の門から」「通達」す「る方便」「であり」、第二は「密咒者による自己を加持し」「身体的作用を束縛」することや「灌頂の次第」「などから」「通達」す「る方便」「である」とする。

【第 3 段落】最初に於いて二あって | 瑜伽行者が所取[と]能取[の]二者は自己の実体性により空であり且つ二[として]無い智は他者によって空であると決(4/5)定し了ってからと | 実体性は無い派が一切の所知は自己の実体性によって空であると決定し了ってから[と]なのである | | その両者の[やり]方はまた照了境 *hjug yul* が勝義の諦に対して騙さないことなのである | [何故ならば]その如くに決定し了ってから入ったことによってその勝義そのものを体験(5/6)する瑜伽[の]現前[識]が現前と成るが故[に]である | 空性に於ける否定[と]成就[の]二として分けるべきこれは実体性は無いと述べる典籍に無いのである[と]思い描くように為されるべきでなくて | [何故ならば]全て[の人]に大いに有名な阿闍梨[たる]獅子賢 *Señ ge bzañ po[hi]* の典籍[がそうである]通りなのである | |

前段落の第一の「方便」[に於いて二あり]とし、その第一は「瑜伽行者が所取[と]能取」「は自己の実体性により空であり」「無」「二」の「智は他者によって空であると決定し」「てから」であり、第二は「実体性は無い派が一切の所知は自己の実体性によって空であると決定し」「てから」「である」とした上で、「両者の[やり]方は」「照了境が勝義の諦に対して騙さないことである」とし、その論拠として「両者」「の如くに決定し」「てから入ったことにより」「勝義」を体験する瑜伽[の]現前[識]が現前と成るが故[に]である」とする。更に「両者の[やり]方」である「否定[と]」「現前[識]が現前と成る」「成就[の]二」に「分ける」ことは「実体性は無いと述べる典籍に無い」「[と]思い描く」「べきでな」とし、

その論拠として「獅子賢」「の典籍」は「否定[と]成就[の]二」から成っているとする。

【第4段落】そこでそれが如何なる如くに(6/7)説示されたかと云うならば| 目など[の]二十のものは自己[により]空であると説示されたことによってマア聞[学と]思[量]が増益を断じた空性それを教示したのであるのであるうえ| 目的は戲論のあらゆる相を否定するが故[に]であるのだ| 体験の空性は| 「修習の道(18b7/19a1)は食する者 za ba pa であつて| 」と[いうこと]そして| 「汚垢は尽きそして生じないもの| 」等[ということ]そして| 「菩提[たる]真如[の]性相である| 」と[いうこと]そして| 実体性[の]お身体(自性身)の注釈に明らかなのである| 如何なる如にかと云うならば| そこで大乘の修習道は空性であると説示したことそして|(1/2)真如の性相[の]基礎(事相)は二[として]無い智であると説示したことそして| 住する[やり]方の残りのお身体[たる]三者は勝義として実体性のお身体であると説示したこと[と]によってなのである| |

「獅子賢」「の典籍」に「説示された」事として、前段落の「否定」に相当する「目など」「二十のものは自己[により]空であると説示」し「たことによって」「聞」「思」「が増益を断じた空性」「を教示した」上で「戲論のあらゆる相を否定するが故[に]である」とし、一方の「成就」に相当する「体験の空性」については、典拠を明示しない三種類の教証を提示し法身である「実体性[の]お身体の注釈」(cf. 北京版 No. 5189, VIII)「に明らか」「である」とする。更に「如何なる如にか」と自問し「獅子賢」「の典籍」で大乘の修習道は空性であると説示し「真如の」事相「は」「無」「二」の「智であると説示し」法身いがいの「三」身も「勝義として実体性のお身体であると説示した」が故にであるとする。

【第5段落】大乘の修習道は諦[によって]空であると説示したことそのものによって法性が直接的に説示されたことは(2/3)無いのである[と]考えるならば| 貴方が同意するその安楽[と]空について承認したことについてマア分位と究竟の機能に対する論争が生起する機会は無いので合理でなく且つ| 如何なる話としてであれ| 「法性の自己の実体である」と同意する道の事物| 」と[いう](3/4)経教から知られるのである| |

著者は敵者の反論を予想して「大乘の修習道は諦[によって]空である」「こと」「によって」は「法性が直接的に説示されたこと」にならない「[と]考えるならば」敵者である「貴方が同意する」「安楽[と]空に」「ついて」「分位と究竟の功能に対する論争が生起する機会は無いので合理でなく」また典拠を明示しない教証を提示して、その「経教から」分かるとする。 (以下続く)